

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐県島根市島根町
電話2-9772

西ノ島町の取組

生徒の「やりたい！」
が町を動かす

（西ノ島におけるふるさと教育の推進）

西ノ島町では、第三次教育大綱の基本理念である「ふるさと西ノ島」への愛着と誇りを持った次代を担う人づくりのもと、地域の教育資源（ひと・もの・こと）を生かした「ふるさと教育」を推進しています。私は、派遣社会教育主事として、ふるさと教育担当者や学校運営協議会を通じた組織的な学校全体へのサポートや、教育コーディネーターと協働して先生方や授業への伴走支援などを行っています。

小中学校九年間の学びの集大成となる中学校三年生の総合的な学習の時間では、「自分たちのやりたい！×町の活性化」をテーマに取り組んでいます。令和六年度に生徒が企画した「のど自慢大

会」では、当初「出演者が集まらない」という壁にぶつかりました。しかし、生徒たちは諦めず、直接町長や地域の方々に参加をお願いに行きました。生徒の熱意に応えた町長や地域の方々により出演者は十八組となり、当日は二百名を超える町民が集まる大盛況のイベントとなりました。生徒たちは、このイベントの成果と改善点をまとめ、より良い開催の形を町に提案しました。

この生徒たちの思いが町を動かし、翌年度には、町の「産業文化祭」の目玉行事として正式にのど自慢大会が開催され、会場には三百人以上の人たちが詰めかけました。この盛り上がり刺激を受けた地域の方々が、小学生を中心とした地域の文化系クラブ活動の合同発表会「なないろフェスティバル」を立ち上げるなど、中学生のアイデアと行動が地域の文化活動を活性化させていきました。

生徒からは、「自分たちの提案で町が動いた。」「将来、西ノ島に恩返しできる大人になりたい。」という感想もあり、活動を通して達成感・自己肯定感・貢献意欲の高まりを感じました。

さらに嬉しい広がりがある今年度もありました。今は高校生となった西ノ島中学校出身の生徒たちが、今年度から公民館の小学生向け事業（キヤンプ等）にボランティアスタッフとして積極的に参加してくれるようになったのです。小学生の頃は「参加者」だった子供たちが、今では運営側として同じイベントに携わってくれています。このような社会教育での活躍も、学校でのふるさと教育で得た経験と自信が、彼らの「運営側として携わる」というチャレンジを後押ししているように思います。

学校と地域が連携し、子供たちが地域の中で多様な大人と出会いながら自分らしく挑戦できるように。「西ノ島で育って良かった！」と胸を張って未来へ羽ばたいていけるようにこれからも学校教育・社会教育の両面で支援を続けていきます。

（氣賀澤誠）

幼小連携・接続推進の取組

第三次西ノ島町教育大綱（令和七年四月策定）では教育の基本理念として「自分の夢を実現する子どもの育成を目指す」と、保小中の連携と魅力ある教育を推進する」と定め、その実現に向けて幼小連携・接続の推進に取り組んでいます。

【交流活動のアップデート】

よりよい交流活動にしたいという保小関係者の願いを受け、昨年度は、学校が中心となって計画する交流活動から、三施設が持ち回り計画する形へ。そして今年度は、教師や保育者の声から始まる交流活動へと毎年アップデートを図っています。

年長児担任と一年生担任が参加する「保小小実務者会」では、情報共有の話題の中から「一緒にできそうなこと見つけ」を行いました。これまで地域のお年寄りの方とのさつま芋づくりや、授業間の休憩を活用した学校での交流が、実現しています。今後実務者が主体となり、「ちよっとだけ非日常の時間」が幼児児童双方の学びの時間として充実するよう、伴走支援を継続します。

【保小小接続研修会】

八月二十四日、幼児教育推進室より笹原企画幹、永島コーディネーターを講師にお招きし、シオンこどもえんにて、保小小接続研修会を開催しました。研修の目的は、①保育者の意図やアプローチの仕方について理解すること、②幼児期の遊びの中で育まれている「学びの芽」を見いだすこと、と設定しました。

当日の遊びは、スライム作りでした。素材はたった一つにもかかわらず、感触や状態の変化、友達との関わりを楽しみながら遊びに没頭する子供の姿を目の当たりにし、素材の持つ力を感じました。子供の姿の背景には、スライムと出会わせ、一緒に遊びながら子供の様子を丁寧に見取り、寄り添いながら声かけや援助を行う保育者の関わりがあったことは、言うまでもありません。午後からのワークショップでは、参加者それぞれ立場から得た気づきを分かち合い、時折笑い声も響くあたたかなひと時となりました。

小さな離島の二園一校という互いに顔が見える環境を生かしながら、持続可能かつ豊かな連携・交流の在り方を今後も追求していきます。

（中山小夜）

「選択肢」

私が以前、中学校で社会科を教えていた時の指導方法です。授業内容を記したプリント一枚を生徒に配布し、解説しながら穴埋めしていくという方法です。授業内容の全容と課題が一目でわかるという発想でこの方法をとりました。

学校訪問で先生方の授業を拝見しながら気づくことがあります。「あの時の私は、生徒のやる気、学びたい気持ちをしつかりと受け止め、育てようとしていたのだろうか。生徒が自分で課題解決しようとする姿を引き出していたのだろうか。」と……

今、先生方は、黒板に授業の流れ、ねらいと課題へのアクセスマethodを複数、継次的に提示しながら指導支援をしております。

選択肢のある指導方法を取り入れ、見える化する。ことによつて、課題に向かおうとする子供たちのきらきらした姿が引き出されているのだと思います。その自ら学ぼうとする気持ち、意欲こそ学力育成の一歩に繋がると考えます。

（奥谷雅也）

